

期日：平成19年5月10日(木)

会場：栗東芸術文化会館さくら

教育に対する私の思いと校長へ期待すること

皆さん、こんにちは。お久しぶりでございます。

私の講話ということですが、本年度は、私が教育長に就任いたしまして、4年目となります。本当に早いものです。

こうして、滋賀県の校長先生方全員の皆さんにお話しができる機会も、これがおそらく最後になるのではないかと考えております。

そこで本日は、私が民間企業出身で県の教育長となった、全国で唯一の貴重な存在であるということですので、私のこれまで全く経験したことのない教育行政の世界に入って、どうだったのか。どんなことを感じ、どのような思いを持って、滋賀県の教育行政に取り組んできたのか。そしてこれからの教育について、どんなことを考えているのかなどなど。

おそらく皆さんには、その辺のところに興味があるのではないかと事務局の担当が申しましたので、今回は、こうしたテーマでお話をし、最後に、校長先生方に私の期待するところ、私の思いを申し上げたいと思います。

なにぶんにも時間が30分間ということですので、いくつか絞ってお話をしたいと思います。ちょうど4時20分をめぐりに話をさせていただきます。

皆さんのお手元に、「教育ジャーナル」の教育長訪問シリーズのインタビュー記事のコピーを出版社の許諾を得ましてお配りしていると思います。

その記事にありますように、私が教育長に就任して2ヶ月余りのときに取材されたものでございます。私の就任当時の初々しい、また率直な思いを理解していただけるものと思います。

まさにこれが私の初心でございまして、教育行政に取り組むに当たっての私の思いの原点でございました。

まず、滋賀県の教育について、この記事にもございますように、驚いたことは体験学習が非常に充実しているということでした。

特に、フローティングスクールという「うみのこ」、この船ですべての小学5年生が1泊2日の体験学習を21年も前からやっていました。今年で24年目でございますけれども、約38万人の子どもたちが既に船に乗って、この体験をした。これはすごいな、滋賀県ってすごいとこやなあ〜と、私は正直驚きました。これは、今でもすごいことだと思います。滋賀ならではの教育としてまさに誇り得るべき、本当に素晴らしい取り組みだと思っております。

また一方、不登校の在籍率が高いという事実。これはなんでだろう。こんなに素晴らしい滋賀県の環境のもとで、どうしてだろう。本当に分からないことです。私は不登校というのは、氷山の一角で、水面下では、いろんな問題があるんだろうと思っています。対処療法的なやり方だけでは、問題の解決にはならない。根っこのところは、何なのか。それをつかんで、未然防止のための教育をしっかりとやらなければならないと思います。これは、いじめの問題でも同じでございます。

次に、「滋賀県が国際化の時代を生き抜いていく人づくりをしていきたい」ということでもございまして、私に期待されたわけでございます。私の経験から、「それでは国際社会で通用する人づくりとはなんぞや」ということを、私なりに考えに考えました。結論として、その記事にもありますように、私なりに5つのポイントがあると思います。

1つ目は、「公の心を持つ」ということです。

勉強は何のためにするのか。そうした根源的な問いかけを常に意識して、教育に当ることが大切ではないかと思えます。

将来、子どもたちが社会に出て、自立し、自らの働きを通じて、何らかの形で社会のお役に立つという、公の心を持つこと。仕事を通して、相手の喜びが自分の喜びとなる。そうした自分のことだけでなく“公の心”というものを持って仕事に当たりますと、そういったものを持っているか、持っていないかで、その人の輝きが違うということをお私これまで実感をしてまいりました。

こうした考えから、何よりも小さいうちから望ましい勤労観・職業観というものを身につけられるような「キャリア教育」というものが非常に大切である、そのキャリア教育を重視して取り組んでいきたいと考えておりました。

そこで、皆さんご存じのように中学2年生の5日間の職場体験の事業をすべての中学校でやってもらいたいと思ひまして、かなりしつこく意識的に取り組んできたところでございます。

1～2日間の職場体験はこれまでもございましたが、私は連続5日間という長さの意味があるものと考えております。仕事を技術的に学ぶということよりも、働くことの意味、汗を流すことの尊さ、同僚やお客様との人間関係、そこで交わされる言葉の大切さ、最後までやったという達成感、そして「よくやったね」と周りの人に言ってもらったうれしさなど、そういう諸々の、学校では体験できないことを知り得るのは、5日間という長さの職場体験ならではのと考えております。

皆さんのご努力によりまして、また地域の受け入れ先のご理解を得まして、昨年度は88%の実施率でございました。そして今年度は、今の時点で100%の見通しがついております。5日間の体験ができない生徒ができるのは残念だということで、残りの12%のところへ私自身出かけていってお話を伺いました。それぞれいろんな事情がございました。今回はやむなしだな、しかし次年度は本当に何とかして実現したいということで、とにかく、その12%に当たるところも今年度は5日間で実施できると言っていたいております。

この100%の実施というのは、兵庫県が初めてでございます。次いで富山県がやっています。それに続いて、この滋賀県が3番目でということでありまして、滋賀ならではの教育活動の1つとして、継続していきたい事業でございます。

2つ目は、「日本人であれば、日本人であることの誇りと自信を持つ」ということでございます。

自分の国のアイデンティティをしっかりと持っていることが、相手の国の人たちを尊重することにつながり、お互いに認め合うベースをつくるものと思ひます。

こうした考えから、特に県立中学校の歴史教科書の採択について、皆さん大変興味を持

っておられたと思うんですが、県教育委員会の委員の方々と何度も何度も議論を重ねました。そして、その結果の採択でありました。

我が国や郷土の伝統と文化を尊重し、正しく歴史を学び、日本人としての誇りと自信を持つことは非常に大切なことだと思っております。

とりわけ海外におりますと、どの国の人々も自国の文化や歴史に確固たる自信と誇りを持っており、それを堂々と主張する姿に何度も出会いました。長い歴史の中に息づいている日本の精神文化や郷土に大いなる誇りと自信を持って世界と対峙していくことが何より大切なことです。

滋賀県は、400万年の歴史を持つびわ湖があり、縄文文化や弥生文化の遺跡もあり、歴史の舞台に登場するお城もたくさんございます。また、各地域でのお祭りや文化財も多く、また歴史上の偉大な人物も輩出されております。まさに滋賀県は日本の歴史の宝庫の地と言えるんじゃないかと思えます。

こうした歴史的文化的な資源を大いに活用して、しっかりした日本人を育てていく、そうしたことのすばらしい環境を備えていると思えます。

3つ目は、「自分のことだけでなく、相手の身になって物事を考え行動できるようになる」ということでもあります。

商売でも、自分だけ儲かるというのではなく、自分だけが儲かるということでは長続きしません。相手も儲かり、自分も儲かる、そして社会にとってもありがたいと思っただけのような商売の姿が実現いたしますと、長続きするものです。

これは、近江商人の「三方よし」の精神に通じることでございます。また、このことは好ましい人間関係づくりをするに当たっての基本となる考え方だと私は思います。

それでは、こうした思いやりや、豊かな心をどうやって育てていくのかということでございます。

不登校やいじめの問題も、この考え方をしっかり教育することが、根っこのところの問題解決につながってくるのではと思います。

「言うは易し、行^いうは難^{やす}し。」まさにその通りでございます。

どうやって人間関係づくりの力を教えるのか。今、その授業づくりを実践し研究をしている学校もございますので、是非この取り組みを進め、「周りの人と仲良く付き合う力」とか、「自分の考えを言葉で伝える力」とか、「困ったときにどうしたらよいか考える力」など、日々の困難を乗り越えて生きる術^{すべ}と言いますか、「ライフスキルプログラム」というもの、これを授業の1つとして、位置づけられるような「滋賀モデル」のプログラムを開発していきたいと思っております。

子どもたちを取り巻く家庭や地域の環境が大きく変わっているだけに、こうしたことは授業の中でしっかりと教えなければならない時代になっているのではないかと、また、教育活動のすべてにわたって、こういったことを意識して働きかけをしていくことが大切であると思っております。

4つ目は、「国語力をしっかり身につける^{すべ}」ということです。

「国際化だから英語が大事だ。」とよく言う方もおられます。しかし私は基本は国語力だと思えます。

私は、海外5カ国で、いろんな、それぞれの国の言葉を勉強しました。50を過ぎてからでもイタリア語も勉強しましたし、そういった意味では大変で非常に厳しいこともございました。しかし、外国語はその気になったら何とかなるんだというふうに、私は体験上実感しております。

ところが、その記事のタイトルにございますように、「国際化は英語よりも国語が基本。」ということで、自分の国の言葉の力が身につけておりませんと、どうにもなりません。

「国際化は、英語よりも国語が基本。」これはまさに私の実感です。

こうした考えから、何としても国語の力を小さいときから子どもたちに身につけさせたい。

国語力は、皆さんご存じのように、すべての学習の土台であります。

国語力をしっかりと習得するということは、同時に母国語によって確固たる物の考え方を身につけることであり、それを的確に発信していく能力を学んでいくことであります。

たとえ技術的に英語能力が身についたとしても、母国語としての国語で物を考え、的確に伝えることができないとなると、まさにそれは「絵に描いた餅」に過ぎません。

そこで、まず読書が大事だと思います。

朝の読書のすすめや、県として「子ども読書活動推進計画」を策定し、現在、市町におきましても、それぞれの推進計画を速やかに策定していただけるよう働きかけを行っているところでございます。

それから県内の国語の専門の先生方に集まっていただきまして、どうやったら国語の力を、楽しみながら子どもたちに身につけさせられるかを考えていただき、その結果、昨年度から“滋賀ことのはプロジェクト”が立ち上がったところでございます。

小中学生は、詩や短歌、エッセイ、五七五、創作など「ことのはコンクール」を、そして小学校・中学校それぞれに向けまして「滋賀ことのは手引集」を作成し、皆様のお手元へ配布したところです。これらを大いに活用していただければ本当にありがたい、そして子どもたちの国語力をしっかりと身につけさせていただきたいと思っております。

また、高校生は「ことのは達人コンテスト」ということで実施いたしました。

昨年度は最初のコンテストでございましたが、大変な盛り上がりを見せ、生徒たちの後からのアンケートを見ても大変好評であったということで、これも引き続き今年度も実施いたしますが、このコンテストがさらに充実し、将来はテレビの番組として取り上げられ、全国版「全日本高校生ことのは達人コンテスト」というような番組となれば、日本の国語力教育の向上にもお役に立てられるのではないかと、私は密かにワクワクして、この楽しい夢を持っているところでございます。

5つ目は、「その人なりの魅力を持つ」ということでございます。

自分の好きなこと、得意なことをとことんやると自信がつきます。自信がつきますと自然と魅力が出てきます。その魅力は世界でも通用します。

そういう意味で、その人なりの魅力が出るような教育をしなければならないと思っています。

そのためには、その人の特徴、個性、興味・関心、能力をつかんで、その良さを引き出

す。それが教師としてのプロの力量ではないかと思えます。

なかなか難しいと思いますが、そのコツは、私は「褒めて育てる」ということではないかと思えます。

私が暮らしてまいりました約22年間の海外生活でも、外国の先生は本当に大げさなくらいに褒めます。そしてその褒める理由を見つけるのが本当にうまいんです！

是非、先生方は「褒め上手」になっていただきたいと思えます。

子どもたちを傷つけ、やる気をそぐ言葉は「何度やってもダメだな」とか「やっても無駄だよ」というものであり、一方励ます言葉は「すごいな」とか「一緒にやろう」、「君しかできない」、「信じている」、「期待している」、「やればできる」などなど、表現はいろいろあると思えますが、先生方の一言が子どもたちの人生を左右すると言っても過言ではありません。

どうか生徒たちの良さを引き出し、認めて、褒め、励ましてやってください。

また、このそれぞれの個性や能力を生かした教育という観点から、本県で一昨年度から導入しました高等学校の全県一区の制度改革がございます。

滋賀県で、戦後最大の教育改革と位置づけられておりましたこの制度改革、皆さんの大変なご努力によりまして、大方の予想よりも1年早く実施することができました。

これまでの「行ける学校を選ぶ」ということから「行きたい学校を選ぶ」という意識改革が進み、それぞれが自分の夢を持ち、魅力を持って、社会に出て行けるような教育をしていきたいと思っております。

以上、国際化の時代にあって、国際社会で通用する人づくりとしての5つのポイントを中心に、これまで私が特に意識して力を注いできたことを申し上げます。

次に、これまで教育行政の世界に入って、いろんな経験をさせていただきました。また、皆さんからもたくさん学ばせていただきました。そして、今の現状をいろいろ見てみますと、本当にいろんな議論がなされております。特に学校に対しましては、また、先生方に対しましては、特に厳しい。本当に一部の、ごく一部の例外的な事象というものをもって、あたかもそれがすべての学校、すべての先生がそうであるような、そんな誤解を国民の皆様にご覧に与えているようなふしがあるように感じて、私はそれが何とも残念であると感じ、また歯がゆい思いをしております。

現場の先生方は本当に頑張っておられます。学校もしっかりとやっております。そういった姿がなかなか世間の方々に分かってもらえてないなど、これが私の実感でございます。

そうしたことから、特にこれから力を入れていきたいと思っております3つのポイントがございます。

いずれにしても、こうした問題をよりよい方向に持っていかうとしますと、2つの観点が重要と思います。

それは「開かれた学校づくり」という観点、それと「みんなで支え合う教育の推進」という観点、この2つの観点から様々な取組みを勇気を持ってやっていくことが大切ではないかと思っております。

1つ目のポイントは、「家庭の教育に企業の力を」ということでございます。

学校、家庭、地域、これまでから何度も何度も、この三者が連携、協力してやろうということを訴えておりますけれども、一つ大事なことは保護者が働いている職場なり企業、この後押しがない限り、なかなか家庭の教育が再生するというのは難しいというふうに、私は民間企業に働いていた経験から実感しております。

そこで、皆さんご存じのように、「滋賀県家庭教育協力企業協定制度」というものを昨年度から設けました。生涯学習課の皆さんが汗水流して、それぞれ手分けして地域の事業所や企業を訪問し、現在144の会社と締結をしております。

学校行事特別休暇制度を設けていただいて学校の参観日や保護者会等の学校行事への参加を働きかけていただいたり、休暇が取りやすい職場づくりとか、残業を少なくして子どもにもっと関わる時間を増やす配慮をしていただくなど、また、子どもたちの職場体験を受け入れていただくとか、家庭教育の啓発ポスターを掲示していただくとか、会社の中で家庭教育についての講座を開くなど、様々な取組みが考えられますが、このような応援をしていただく企業をどんどん増やしていきたいと考えております。

「家庭教育の再生なくして日本の教育の再生はない。」と私は思います。

家庭はまさに社会の基盤であり、家庭における良き人間関係はそのまま、地域の和に広がり、やがては国家の品格にもつながっていくものなのです。

そして「家庭教育はすべての教育の原点である。」これを忘れてはいけない。これを国民みんなが、県民みんなが本当に自覚するような働きかけを我々としてもやっていくべきだというふうに思っています。

2つ目のポイントは、「地域の力を学校へ」ということでございます。

これは地域の、例えば安全ボランティアとして通学路の安全を見守っていただいている地域の方々は、既に24,000人を超えております。すばらしい力でございます。こういったことは、地域の力というものを安全・安心な学校づくりに取り入れさせていただくという点で、すばらしい取り組みだと思います。これだけでなく、例えば本物に出会う連携授業。今、博物館や美術館、信楽の陶芸の森など、本物の、専門の方々や文化ボランティアの皆さんと先生が一緒になって授業をつくっていくこともやっております。子どもたちにとっても、大変好評であります。

また、今年度から、学校と地域を結ぶコーディネーターとして「学校支援ディレクター」を一人採用いたしました。地域の力を学校の中へ、地域の方々に支援をしていただけるような仕組みづくりに取り組んでまいりたいと考えております。

そして3つ目のポイントは、「みんなで支え合う滋賀の教育」ということでございます。

昨年度から11月1日を「滋賀 教育の日」として制定いたしました。10月、11月を「滋賀の教育月間」として取り組みを始めました。

皆様のご努力のおかげであります。この事業の関連で1,208件の事業が登録されました。延べで約39万人の県民の方々が参加され、滋賀県の人口139万人のほぼ3割に相当する方々が参加をしたということでございます。

こういったことを今年度から、さらに広げていきたいと考えています。こうした滋賀教育月間の間に、是非とも皆様方には「学校公開週間」ということで、できるだけ多くの日が続けてオープンに、保護者の方々のみならず、地域の方々にも学校の実情を見ていただく、これが何よりも「地域の方々となじみになる土壌づくり」につながることで、そしてひいては世間の誤解を解く、また世間からの正しい理解を得て、むしろいろいろ協力していただけることにつながっていくのではないかと私は思っています。

そして、「早寝・早起き・朝ごはん」の県民運動につきましても、県民みんなこぞってこうした取り組みをしていただこうということで取り組んでいます。

このような取り組みを通して、社会全体で子どもの育ちを支える環境づくりに力を入れていきたいと思っております。

最後に、校長先生の皆さんへ期待することを、白板に書きながら、3つ申し上げたいと思います。

1つは、「教風をつくる^{いしずえ}礎に！」ということでございます。

皆さんのお手元のコピーの一番最後のページ「内外教育」の本年4月17日号に「校風・教風・学風」のタイトルで、上越教育大学新井郁男^{あらいいくお}名誉教授の巻頭文が載っております。

また、私のインタビューの記事にも、学校現場と企業の違いということで私が感想を述べているところがございます。企業であれば会社の理念を示し、その理念をもってその使命を実現するために、会社の社員としてどうあるべきかという行動規範や心構えを示して仕事を進めるのが普通であります。学校では、生徒はどうあるべきかは示されていますが、先生がどうあるべきかは示されていないと感じていました。

皆さんの学校には「校風」というものはあります。

そして最後の「学風」。これは教えを受ける子どもたちの姿ということで、学ぶ側・生徒の心構えなどはどうあるべきかということを示すものだそうですので、これもあります。

しかし、「教風」というのは、学校にはないのではないかと、新井先生はおっしゃっております。

新井先生が、上海に行かれ学校訪問をされた際、「教風」という言葉が学校要覧に「学風」と並記されていることにハッとされたということです。まさに、「教風」という教える側、即ち教師としての心構えをしっかりとみんなに分かるように明示されていることに驚かれ、「我が国の学校では一般的に学校教育目標は示されているが、教師の心構えを打ち出している学校をこれまでのところ見たことがない。」そして、「我が国では教師の力量、指導力の向上が大きな課題となっているが、まずもって、各学校では教師の共通スローガンとしての『教風』を明確にすることが求められるのではないだろうか。」とおっしゃっています。

まさに、私が就任2ヶ月のときに感じた、学校現場と民間企業との違いであります。

生徒のあるべき姿や目指す生徒像は示されている一方で、教師のあるべき姿、目指す教師像というのがないため、「先生の姿が見えない。」「この学校の先生方はどんなふうに私たちの子どもに対して接していってくれるのだろうか。」「どんな心構えでやってくれるのだろうか。」「どんな行動指針を持っておられるのか。」などが見えない。「自分たちはこうなんだ。」としっかりと宣言して、行動で示すということが大事なのではないかと考えていました。

そのような中で、私はこの4月17日付けの「内外教育」を見たときに、「本当だ！まさにこれだ。」「私の感じたことは、このことだったのだ。」と改めて感じたわけでありませう。

そこで、今年度から皆さんの学校の要覧の中に、こういった部分も示していただけるようにということで昨年度末にお願いしてはいますが、是非とも校長先生自らが教風をつくり、その礎となっただき、皆さんのそれぞれの学校の「校風・教風・学風」を確立していただきたいと思うのであります。このことが皆さんの特色ある学校づくりにもつながっていくものと思います。

2つ目は、「正道闊歩。威風堂々と！」このことを、是非皆さんに期待したいと思います。

やはり皆さん、それぞれが信念を持って教育に携わっておられます。皆さんが信じておられる教育の正道を威風堂々と闊歩していただき、その後ろ姿を子どもたちや保護者や、地域の方々に、そして他の先生方にしっかりと示して欲しいと思っております。

その姿こそが、みんなから信頼される最も大切なものではないでしょうか。

そして3つ目は、「現場が元気に。そして丁寧に！」というふうに私は書きました。

とにかく現場が元気でなければ何事も良くなるのは、民間の会社もどこも同じです。校長として管理者として、現場の先生方が本当に元気が出るように、いろいろと工夫していただく。そして、丁寧に子どもたちに接することができるように先生方の心の余裕というものを持っていただけるような配慮をしっかりとしていただきたいと思っております。

昨今、この丁寧ということがなかなか難しい時代になっております。しかし、何事にも丁寧に接するという心の広さが求められており、また大事なことはないかと思っております。

そういったことで、私は最後に校長先生の皆様に、3つのメッセージをお送りしまして今日の話のまとめとさせていただきます。

昨年末に60年ぶりに教育基本法が改正されまして、我が国として教育の再生に向けた新たな第一歩を踏み出したこの時期に、私も皆さんも、これからの時代を担う子どもたちの教育に関わっているという幸運に恵まれております。

責任は重いものがございますが、それだけやりがいがあるということでございます。

軸がぶれることのないよう、私も正道闊歩、自らが信ずるところを、教育の正道を、威风堂々と闊歩して、この1年を全うしたいと考えております。

最後の最後になりますが、これまでの皆様方の現場でのご尽力に対しまして、また、これまでの県の教育行政に対します皆様のご理解とご協力に対しまして、心から感謝申し上げます。(礼)

この1年、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。